

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	小学生と中学生と高校生のキャリア発達に関する文献レビュー : 2011年から2021年までの日本国内の研究に着目して
Author(s)	堀井, 順平
Citation	学習開発学研究 , 14 : 171 - 180
Issue Date	2022-03-30
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/52294">10.15027/52294</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052294">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052294</a>
Right	Copyright (c) 2022 広島大学大学院人間社会科学研究科学習開発学領域
Relation	



## 【資料】

# 小学生と中学生と高校生のキャリア発達に関する文献レビュー —2011年から2021年までの日本国内の研究に着目して—

堀井 順平<sup>1</sup>  
(2022年1月10日受理)

## A review of research on career development of elementary school, junior high school and high school students —Focusing on career development research in Japan from 2011 to 2021—

Junpei HORII

### はじめに

#### 現行の日本のキャリア教育とキャリア発達研究

現在、日本の学校教育において、児童生徒に対するキャリア教育の需要が高まっている。元々、日本では、正規雇用への直接的な移行を支援するための施策の一環として、1999年にキャリア教育が提唱され、勤労観や職業観の育成をその中心に据えていた(三村, 2020)。しかし、このことは、教育界において、キャリア教育とは勤労観、職業観の育成であるという理解が蔓延し、子どもたちの意識に働きかけ、就労に向けた意欲を向上させることだという解釈の一助になっていた(児美川, 2014)。そこで、現在、キャリアは「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見だしていく連なりや積み重ね」、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている(中央教育審議会, 2011)。また、キャリア教育の定義の中に含まれているキャリア発達は「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」と定義されている(中央教育審議会, 2011)。中央教育審議会(2011)によって、キャリアやキャリア教育、キャリア発達が再定義されてから約10年間で、小学校や中学校、高等学校においてもキャリア教育の充実が一層求められるようになっていく(文部科学省, 2017a, 2017b, 2018)。このことから、小学生や中学生、高校生のキャリア発達に関する研究を進めていくことは、現代の日本の学校教育において有益であるといえる。

これまで、日本の学校教育段階にいる子どものキャリア発達に関する研究をレビューした論文として、藤岡(2015)が挙げられる。藤岡(2015)は、2006年度から2013年度までに刊行された「キャリア教育研究」(日本キャリア教育学会)に掲載され、小学生から大学生を対象としたキャリア発達に関する研究を行っている36論文について文献展望を行い、研究動向について分析している。その結果、小学生を対象とした研究は少なく、特別支援学校の児童・生徒を対象とした研究は皆無であり、高校生と大学生を対象とした研究が多く行われていたことを見出している。また、研究内容では、キャリア発達や進路選択に関する自己効力感に関する研究が多く見られる一方、キャリアカウンセリングに関する研究はほとんど見られなかったことも指摘している。

しかし、藤岡(2015)では、対象となる論文が「キャリア教育研究」に限定されており、他の学会誌におけるキャリア発達に関する研究がレビューされていない。キャリア教育が教育活動全体を通じて取り組むものである(中央教育審議会, 2011)ことを踏まえると、他の学会誌に掲載されたキャリア発達研究を含め、それらの動向を整理する必要があるといえる。

<sup>1</sup> 広島文化学園大学看護学部看護学科

また、藤岡（2015）の文献研究以降、学習指導要領においてもキャリア教育の充実が一層求められており（文部科学省，2017a，2017b，2018），学校教育段階にいる子どものキャリア発達の研究の必要性が高まっていると考えられる。

#### 本研究の目的

そこで、本研究では、2011年から2021年の小学生、中学生、高校生を対象としたキャリア発達に関する先行研究をレビューし、これまで得られた知見と、小学生、中学生、高校生のキャリア発達研究における今後の課題を整理することを目的とする。これらの点により、初等・中等教育段階でのキャリア教育に向けた提言を行うための研究の方向性を見出す一助となる。なお、本研究では初等・中等教育段階に位置する小学生、中学生、高校生のキャリア発達研究の動向に焦点を当てるため、大学生を対象とした研究については取り上げないこととする。

## 文献検索の方法と結果

#### キャリア発達に関する文献の選定条件

キャリア発達に関する文献を選定するにあたり、以下の条件を設定した。1つ目として、小学生、中学生、高校生を対象としたキャリア発達に関する実証・実践研究を行っていることである。2つ目として、2011年から2021年に公表された研究論文であることである。3つ目として、複数の専門家の審査を経て学会誌に掲載されていることであり、大学の紀要など複数の専門家からの審査を経していない論文は対象外とした。

#### キャリア発達に関する文献検索の方法

キャリア発達に関する文献検索にあたり、Google Scholarを使用した。Google Scholarでの文献検索において、学校段階（小学生、中学生、高校生）とキャリアに関する用語（職業、就職、就労、労働、勤労、進路、キャリア）の組み合わせをキーワードとし、それらが記事タイトルに含まれることを条件として検索した（例えば、「小学生 職業」）。また、小学生は「児童」、中学生や高校生は「生徒」という呼称も使用されるため、各学校段階の子どもの呼称（児童、生徒）とキャリアに関する用語（職業、就職、就労、労働、勤労、進路、キャリア）の組み合わせもキーワードとし（例えば、「児童 職業」）、記事タイトルに含まれることを条件として検索した。そして、検索する研究論文を2011年以降に指定した。

その結果、小学生をキーワードとする場合、「小学生 職業」が8件、「小学生 就職」と「小学生 就労」が0件、「小学生 労働」と「小学生 勤労」と「小学生 進路」が2件、「小学生 キャリア」が24件であった。また、児童をキーワードとする場合、「児童 職業」が40件、「児童 就職」が10件、「児童 就労」が24件、「児童 労働」が187件、「児童 勤労」が7件、「児童 進路」が47件、「児童 キャリア」が120件であった。次に、中学生をキーワードとする場合、「中学生 職業」が13件、「中学生 就職」が0件、「中学生 就労」が8件、「中学生 労働」が4件、「中学生 勤労」が1件、「中学生 進路」が47件、「中学生 キャリア」が42件であった。次に、高校生をキーワードとする場合、「高校生 職業」が54件、「高校生 就職」が35件、「高校生 就労」が13件、「高校生 労働」が27件、「高校生 勤労」が0件、「高校生 進路」が184件、「高校生 キャリア」が112件であった。次に、生徒をキーワードとする場合、「生徒 職業」が75件、「生徒 就職」が12件、「生徒 就労」が27件、「生徒 労働」が16件、「生徒 勤労」が3件、「生徒 進路」が235件、「生徒 キャリア」が220件であった。そのうち、複数の専門家から審査を受け、学会誌に掲載されている論文を本論文でのレビュー対象とした。加えて、藤岡（2015）に従い、「キャリア教育研究」に2011年から2021年に掲載された全論文のうち、小学生と中学生と高校生のいずれかを対象としたものもレビュー対象とした。その結果、小学生を対象とした論文が3件、中学生を対象とした論文が5件、高校生を対象とした論文が15件、複数の学校段階を対象とした論文が5件となった。

### 学会誌に掲載された小学生、中学生、高校生のキャリア発達に関する研究のレビュー

#### 小学生を対象としたキャリア発達研究

**職業的発達の調査研究** 小学生を対象としたキャリア発達研究の1つに、宮田（2012）がある。宮田（2012）は、Hollandの職業の6領域に基づいた希望職業の観点から小学生の職業的発達について検討している。その結果、小学校低学年と高学

年では希望職業の志向性に違いがあり、小学校中学年頃から他者を意識した仕事価値が出現していることを見出している。また、学年層が上がるにつれ、男女の希望職業の領域が変わっていくことを明らかにしており、ジェンダーによる希望職業の選択は、低学年の頃からなされていたと考察している。

**実践研究** 授業場面の観察や教育実践を行った研究として、三輪（2012）と大前他（2020）が挙げられる。三輪（2012）は、小学校高学年の児童を対象として、アナロジー推論（類似した出来事や経験を基に新奇の出来事理解を行う推論）が勤労観の形成に及ぼす影響について検討している。ここで、三輪（2012）は、勤労観を「働く意義を心的な側面に関連付けた、働き方の基盤となる価値観」と定義し、職業発達の基盤となる児童期での職業観や勤労観の形成が重要であると述べている。そして、道徳の授業場面を用いた2つの研究を通じて、アナロジー例の提示やアナロジー推論の使用が児童の勤労観の形成につながることを明らかにしている。

また、大前他（2020）は、小学5年生を対象に、人工知能の教育実践前後による動機づけ（「内発的価値」「獲得利用価値」「成功期待」）やキャリア形成（「人工知能を使って社会に貢献したいという気持ちを身につけること」）の違いや、教育実践と動機づけとキャリア形成の関係について検討している。なお、大前他（2020）の教育実践は、知識供与を主とする座学を中心とする教育実践Aと、学習者同士が学びあい人工知能を提案する教育実践Bで構成されている。その結果、教育実践Aの実施前から教育実践Bの実施後において動機づけの全ての要因とキャリア形成が有意に向上すること、教育実践Bは教育実践Aによって高められた内発的価値の上昇を維持できないが、成功期待をさらに高める効果があること、教育実践によって動機づけの全ての要因を高めることで間接的にキャリア形成が促進されることを明らかにしている。

**まとめ** 以上より、2011年から2021年の間に学会誌に掲載され、小学生を対象とした研究件数は3件と依然少数である。それらの研究内容について、希望職業の発達（宮田，2012）、勤労観の形成（三輪，2012）、人工知能を用いた社会貢献への志向の変化（大前他，2020）が検討されている。また、研究方法についても、従来多く用いられてきた1時点の質問紙調査法（宮田，2012）だけでなく、観察法（三輪，2012）や実践研究（大前他，2020）も行われている。総じて、小学生を対象としたキャリア発達研究の件数が少ない中で、その内容や方法に若干の幅の広さがあるといえる。

#### 中学生を対象としたキャリア発達研究

**親や友達との関係から捉えた研究** 安達・佐藤・赤木（2014）は、進路決定に際して中学生が親や友達と行うコミュニケーション内容について、半構造化面接によって検討している。その結果、進路決定時における親とのコミュニケーションは「依存から自立へ」というテーマを中心に、友達とのコミュニケーションは仮想的な一体感の中で展開することを明らかにしている。また、進路決定後には、生徒の中に自分に対する思いの深まりと親や友達に対する思いの深まりが生じることを明らかにしており、生徒の中には自己受容を促進する思いと自己受容の促進を妨げる思いが混在していると考察している。

**キャリアイメージの調査研究** 山田（2016）は、中学1年生から中学3年生を対象として、レジリエンス（「意欲的活動性」「内面共有性」「楽観性」）がイメージ描画法によって表されたキャリアイメージに及ぼす影響について、学年差や性差を含めて検討している。その結果、まず、キャリアイメージについて、「山登り」「拡張」「道程」「出来事」「選択」「浮遊」「循環」「積み重ね」「成長」の9タイプを抽出し、男子では「山登り」と「選択」が、女子では「積み重ね」のキャリアイメージを持つ人が多いことを見出している。次に、レジリエンスのうち、「意欲的活動性」と「内面共有性」で女子が男子よりも高く、3年生が1,2年生よりも高いことを見出している。その上で、男女ともに、レジリエンスのうち「内面共有性」がキャリアイメージに有意な影響を示し、男子では「山登り」「拡張」「道程」に、女子では「拡張」「選択」「積み重ね」に有意な正の影響を及ぼすことを明らかにしている。これらの結果より、山田（2016）は、レジリエンスがキャリアイメージに及ぼす影響に男女で相違があるという知見は、男女の特性を尊重しながら個々の生徒のキャリア形成を促すキャリア教育を工夫していく上での手がかりになると指摘している。

**自律的進路動機の縦断的研究** 中学生を対象としたキャリア発達研究のうち、どれだけ自己決定的な動機で高校に進学するかを表す「自律的進路動機」（永作・新井，2005）に着目したものとして、山田（2011a，2014）がある。山田（2011a）は、中学2年生を対象として、職場体験前後および職場体験終了から2ヵ月が経過した事後学習後の進路成熟および自律的進路動機の変容について検討している。その結果、進路成熟について、職場体験の前後で教育進路成熟と職業進路成熟が向上し、教育進路成熟は職場体験後もその効果が持続することを明らかにしている。自律的進路動機について、職場体験前後で高校進学の自己決定的な側面（「統合的・内的調整」）が向上し、非自己決定的な側面（「外的・取り入れ的調整」）

が低下することも明らかにしている。また、山田 (2011a) は、5 日間の職場体験による進路成熟、高校への進学動機の変容に対人的スキルへの自信や体験先の希望レベルが与える影響について検討している。その結果、対人的スキルへの自信の高さや体験先の希望レベルの高さが、職場体験満足度を媒介して進路成熟や自律的進路動機の向上を促進することを明らかにしており、職場体験の効果の向上を図るためには、生徒の対人的スキルへの自信を高め、できる限り生徒の希望に沿った職場での体験を実施することの重要性を指摘している。

次に、山田 (2014) は、9 月上旬、10 月上旬、翌年の 1 月上旬、3 月上旬の計 4 回の質問紙調査を実施し、中学校 3 年生の自律的進路動機の変容と、生徒の学級担任に対する信頼の度合いや進学指導場面での学級担任の対応との関係について検討している。その結果、学級担任への信頼度が低い生徒では、9 月上旬から 10 月下旬にかけて「外的・取り入れ調整」が上昇、学級担任への信頼度が高い生徒では、9 月上旬から 3 月下旬にかけて「外的・取り入れ調整」が低下、学級担任への信頼度が中程度の生徒では、1 月上旬から 3 月上旬にかけて「統合的・内的調整」が上昇することを明らかにしている。また、進学指導場面でカウンセリング的対応を行った学級担任の生徒は、9 月上旬から 3 月上旬にかけて「無動機」が、カウンセリング的対応とガイダンス的対応の双方を組み合わせた対応であるバランス的対応を行った学級担任の生徒は、10 月下旬から 3 月上旬の間に「外的・取り入れ調整」が低下することを明らかにしている。以上の結果より、山田 (2014) は、受験期の進学指導においては、カウンセリング的対応を中心としながらガイダンス的対応を組み合わせることが、自律的進路動機を促進するために重要であると論じている。

**キャリア教育の実践研究** キャリア教育プログラムの実践からキャリア変数の変化を捉えた研究もある。荒木・高橋・柏原・佐藤 (2020) は、NPO 法人だっぴが主導する、中学生対象のキャリア教育プログラムの「中学生だっぴ」に参加した中学生のライフキャリア・レジリエンスと自尊感情の変化について検討している。その結果、「中学生だっぴ」の実践が、ライフキャリア・レジリエンスと自尊感情を向上させることを明らかにしている。この結果より、大学生や地域の大人たちに話を肯定的に聴いてもらい多様な価値観や生き方に触れることの重要性が示唆されている。

**まとめ** 以上より、2011 年から 2021 年の間に学会誌に掲載され、中学生を対象とした研究件数は 5 件と少数である。これらの研究内容として、進路決定における親や友達との関係性 (安達他, 2014)、レジリエンスのキャリアイメージに対する影響 (山田, 2016)、自律的進路動機の変化 (山田, 2011a, 2014)、ライフキャリア・レジリエンスの変化 (荒木他, 2020) が検討されており、多様な内容が取り上げられている。また、研究方法として、縦断的な質問紙調査法 (山田, 2011a, 2014)、面接法 (安達他, 2014)、描画法 (山田, 2016)、実践研究 (荒木他, 2020) が行われており、多様な方法が採用されている。総じて、中学生を対象としたキャリア発達研究の件数は多くないものの、その内容や方法に幅の広さがあるといえる。

#### 高校生を対象としたキャリア発達研究

**親との関係から捉えた研究** 進路に関する親のサポートに着目した研究として、成田・森田 (2015) がある。成田・森田 (2015) は、高校生を対象として、進路に関する親のサポートと進路選択自己効力、進路選択行動との関連を検討している。高校生が受ける進路に関する親のサポートとして、励まし、気持ちの理解、将来への期待を示すといったポジティブな感情を喚起するサポートである「期待・励まし」と、親の職業や仕事上であった体験の話をするサポートである「親の職業経験に関する情報提供」の 2 因子を抽出している。そして、「期待・励まし」が進路選択自己効力を高め、進路選択自己効力が進路選択行動を促すことを明らかにしている。

**高校 1 年生を対象とした研究** 高校 1 年生に特化した研究として、橋本 (2016)、児玉・唐本 (2017)、南・浅川・新見・古川・三木 (2013)、寺田・紺田・清水 (2012) が挙げられる。橋本 (2016) は、商業科、看護科、普通科の高校 1 年生を対象とした質問紙調査より、「重要な他者」と定義されるメンターからの支援内容についての学科間の差異を検討している。その結果、まず、メンターからの支援内容として、「受容・承認」「役割モデル」「指導者」「共感 (仲間)」の 4 因子を抽出している。また、学科によるメンターからの支援内容の差異について、看護科の生徒は商業科の生徒よりも 4 因子のいずれの支援も受ける傾向が高く、普通科の生徒は商業科の生徒よりも「受容・承認」「役割モデル」「共感 (仲間)」の支援を受ける傾向が高いことを明らかにしている。さらに、学科ごとのメンター別の支援の特徴について、商業科において「役割モデル」と「指導者」では先生から、「共感 (仲間)」では友人からより多くの支援を受けていること、看護科において「共感 (仲間)」では友人からより多くの支援を受けていること、普通科において「指導者」では先生から、「共感 (仲間)」では友人からより多くの支援を受けていることを明らかにしている。

また、児玉・唐本(2017)は、理系希望者の多い進学校の高校1年生の女子を対象として、薬剤師、看護師、教師、医師という4種類の職業に着目し、理想のキャリア・パターン別に、5種類のキャリア自己効力(「仕事内容に対する自己効力」「就業継続一貫に対する自己効力」「再就職に対する自己効力」「進学に対する自己効力」「就職に対する自己効力」)の特徴を検討している。その際、理想のキャリア・パターンとして、結婚や出産をしてもしていなくても、仕事を続ける「仕事継続コース」、結婚もしくは出産によって仕事を辞め、子育て後再就職する「再就職コース」、結婚もしくは出産によって仕事を辞め、その後は働かない「後半無職コース」の3パターンを設定している。その結果、「仕事継続コース」が「再就職コース」や「後半無職コース」よりも「就業継続一貫に対する自己効力」が高いことを明らかにしている。次に、理想のキャリア・パターン別に、職業に対する結果期待の影響を考慮した上で、5種類のキャリア自己効力と専門職に対する興味の関連性を検討している。その結果、「仕事継続コース」の場合、薬剤師と看護師と医師において「仕事内容に対する自己効力」が、医師と教師において「進学に対する自己効力」がそれぞれ職業興味に有意な正の影響を及ぼすことを明らかにしている。「再就職コース」の場合、看護師と医師と教師において「仕事内容に対する自己効力」が、薬剤師と医師と教師において「進学に対する自己効力」がそれぞれ職業興味に有意な正の影響を及ぼすことを明らかにしている。「後半無職コース」の場合、看護師および医師において「進学に対する自己効力」が職業興味に有意な正の影響を及ぼすことを明らかにしている。

南他(2013)は、学校適応感がキャリア意識に及ぼす影響について、5月時点、7月時点、5月から7月にかけての変化の3点から探索的に検討している。その結果、「部活動への意欲」「家族関係」「教師との関係」「友人関係」「学習への意欲」といった多くの学校適応感の側面がキャリア意識の向上に影響を示し、その影響は特に7月において強くなっていることを明らかにしている。この結果より、南他(2013)は、教師や友人との良好な人間関係づくりと学業や部活動に意欲的に参加できる学校環境づくりがキャリア意識の向上につながることを指摘している。

高校1年生を対象とし、かつ職業観に関する国際的な観点を取り入れた研究として、寺田他(2012)がある。寺田他(2012)は、アメリカ合衆国、ドイツ、インドネシア、日本、韓国、中国の6か国の第10年次生(高校1年生)を対象として、職業観に関する因子分析によって共通因子を抽出した上で、職業観とキャリア形成要因(キャリアモデル、キャリアイベント)との関連について検討している。その結果、6か国に共通する職業観として、「自己実現・生活享受志向」「社会・奉仕志向」「経済・安定志向」「リーダー・富有家志向」の4因子が抽出されている。そして、プラスのキャリアモデルとマイナスのキャリアモデルの双方やプラスのキャリアモデルのみある人は、マイナスのキャリアモデルのみある人やいずれのキャリアモデルも持たない人よりも「自己実現・生活享受志向」「社会・奉仕志向」の得点が高いことを明らかにしている。また、「学校の普通教科での学習」や「職業高校の専門学習」や「家庭での仕事の手伝い」の体験がある人はない人よりも、職業観の複数の側面の得点が高いことを明らかにしている。以上の結果より、寺田他(2012)は、高校1年生の段階でのキャリア教育において、普通教科や職業教科での学習や家庭での仕事の手伝いといった多様な経験を見直す必要性を指摘している。

**高校3年生に特化した研究** 知念・中尾(2018)は、沖縄県の高校3年生を対象として、学力とキャリア意識との関係について検討している。その結果、4月と9月時点の学力と翌年2月のキャリア意識との間の関連が弱く、学力とキャリア意識はそれぞれ独立したものとして存在している可能性を考察している。

さらに、卒業後に就職を希望する高校3年生に限定した研究として、大谷・木村・藤生(2013a, 2013b)や大谷・山本・藤生(2015)がある。大谷他(2013a)は、進路探索行動の因子を明らかにした上で、各因子が進路意思決定にどのような影響を及ぼすのかについて検討している。その結果、進路探索行動として「環境探索行動」と「自己探索行動」の2因子が抽出され、「自己探索行動」よりも「環境探索行動」が進路意思決定に強い正の影響を及ぼすことを明らかにしている。次に、進路探索行動の組み合わせの違いが進路意思決定にどのような影響を及ぼすのかについて検討している。その結果、「自己探索行動」と「環境探索行動」の双方を行う高校生の進路意思決定が良好であることを明らかにしており、「自己探索行動」と「環境探索行動」を同時に行うことの重要性を示唆し、職業カードソート法が有効であると考察している。

続いて、大谷他(2013b)は、進路選択サポート知覚として「友人のサポート」「教員のサポート」「親のサポート」を取り上げ、各サポートが進路意思決定にどのような影響を及ぼすのかについて検討している。その結果、「教員のサポート」と「親のサポート」が進路意思決定に有意な正の影響を及ぼすことを明らかにしている。次に、進路選択サポート知覚の組み合わせの違いが進路意思決定にどのような影響を及ぼすのかについて検討している。その結果、進路意思決定の高い順に、友人と教員と親の全てからサポートを知覚している生徒、友人と教員もしくは親のいずれかからサポートを知覚している生

徒、友人のサポートを知覚していない生徒、誰からのサポートも知覚していない生徒となっている。これらの結果より、大谷他（2013b）は、「教員のサポート」と「親のサポート」の両方が知覚されるとき、進路意思決定に最も効果があることを指摘している。

続いて、大谷他（2015）は、求人票開示前の5月と求人票開示後の9月のそれぞれにおける進路選択サポート知覚、進路探索行動、職業選択動機（「自己実現志向」「安定志向」「地元志向」「給料志向」）が、大多数の生徒が就職試験を経験したであろう11月の進路意思決定に及ぼす影響について検討している。その結果、5月と9月の双方において、進路選択サポート知覚の全ての下位尺度が、5月のみでは「自己実現志向」が、9月のみでは「安定志向」と双方の進路探索行動が11月の進路意思決定に有意な正の影響を、9月のみでは「給料志向」が有意な負の影響を及ぼすことを明らかにしている。これらの結果より、大谷他（2015）は、進路意思決定の支援には適時性があることを指摘している。

さらに、アイデンティティの観点から高校3年生のキャリア発達に着目した研究として、溝上（2020）がある。溝上（2020）は、地方青年としての高校生のキャリア選択におけるアイデンティティホライズン（アイデンティティの地平を、在住地域（地元）や親・友人の影響を受けながらも、時間的・空間的に広げられる程度）が高校生の日々の学習や心理的発達に及ぼす影響について検討している。その結果、アイデンティティホライズンのうち、教育・仕事ホライズンは職業キャリア、アイデンティティ統合、卒業後の仕事や社会で必要な資質・能力に、教育ホライズンは日々の学習にも有意な正の影響を及ぼすことを明らかにしている。これらの結果より、溝上（2020）は、異なる地域へ移動することをキャリア選択の一選択肢として含み込むことが、青年のアイデンティティの地平を広げ、結果として学習や心理的発達を促進すると指摘している。

**進路選択の縦断的研究** 中堅受験校の高校生の進路形成過程における「悩み」に着目した研究として、三関（2018）がある。三関（2018）は、高校2年生の9月と高校3年生の12月の2回にわたるインタビュー調査を実施し、進路形成過程における「悩み」の類型とその変遷について検討している。その結果、進路形成過程における「悩み」の類型として、将来や職業への志望動向が明確で、志望校に対する成績・自己資本が確保されている「絞られる」、将来や職業への志望動向が明確であるが、成績・自己資本が志望校に見合っていない「偽装と拡散」、将来や職業への志望動向が不明確であるが、豊富な成績・自己資本を有している「探索迷子」、将来や職業への志望動向が不明確で、成績・自己資本が不足している「計測不能」の4タイプが抽出されている。そして、生徒の進路志望決定には、成績・自己資本を基に達成すべき目標を下げる「表層的な進路決定」の層と、当初の達成すべき目標に向かう「きちんと悩んだ進路決定」の層を見出している。

進路多様校の男子高校生を対象とした研究として、田中（2012）がある。田中（2012）は、高校1年生の4月から高校3年生の4月までの7回にわたる縦断的調査によって、人気があり稀少で学歴不問の職業を表す「夢追い型職業」から現代の高校生が受けている影響について検討している。その結果、1年生、2年生、3年生の各学年の4月時点において、「夢追い型職業」が希望職業の最上位に位置していることを見出し、進路選択に対して、成績以外に「興味・関心」や「将来の夢」が大きく影響していると考察している。また、自由面接法による質的調査から、学力下位校から大学進学を希望する生徒の進学要因について検討している。その結果、学力下位校から大学進学を希望する生徒の進学要因として、今後の生活保障を見出しており、当該の生徒にとって、大学進学で重要なことはあくまで就職することであると考察している。

**回想を用いた研究** 大学生を対象に、高校時代のことを回想してもらった研究もある。上野（2014）は、大学1年生を対象に、高校時代のことを回想してもらい、高校時代のライフスキルの獲得を導く運動部活動経験が進路成熟に及ぼす影響について検討している。その結果、高校時代の運動部活動経験や競技状況スキル（運動部活動場面における心理社会的スキル）がライフスキルを経由して進路成熟を促進することを明らかにしており、大学への進学に関わる進路選択をライフイベントの1つとして位置づける場合、運動部活動経験がそのライフイベントの対処に役立つと指摘している。

**実践研究** キャリアデザイン形成を促す実践研究も見られる。白井（2015）は、高校での出前授業において、回想展望法（小さい頃から大きくなったら何になりたいかを回想させ、そこに一貫性と変化を読み取ることでキャリアデザインを組み立てる技法）が自己の気づきと職業選択の促進とどのように関連しているのかについて検討している。その結果、「職業目標の認識促進」に対して、職業目標について過去からのつながりを読み取る「一貫性の理解」が有意な正の影響を及ぼすことを明らかにしており、高校生に対して職業目標の過去からのつながりを考えさせることの重要性を指摘している。

**特別支援学校での実践研究** 特別支援学校を対象にした実践研究も見受けられる。佐々木・小野島・縄岡（2020）は、知的障害特別支援学校高等部2年に在籍する重度の知的障害のある自閉スペクトラム症の女子生徒を対象として、職業教育と

して実施する作業学習において、仕事そのもの以外のスキルであるソフトスキルの向上を目的として介入を行っている。その結果、環境にある視覚的な刺激の統制や視覚的な理解を促す構造化など、視覚的な情報処理という自閉スペクトラム症児の強みを活用する環境設定により、ソフトスキル向上につながることを明らかにしている。

また、坂内・熊谷 (2017) は、学力検査によらない入学者選抜を行う高等学校と就労のためのカリキュラムのある特別支援学校の各 3 名の生徒を対象として、就労を目指した短期間のソーシャルスキルトレーニング (以下、SST とする) を実施し、その効果を自己評価と他者評価から検討している。その結果、高等学校と特別支援学校の双方で SST 後のスキルの他者評価が上昇したが、高等学校の 3 名の生徒は自己評価と他者評価の差が縮まったのに対し、特別支援学校の 3 名の生徒は自己評価が高いままであったことを報告している。また、高等学校と特別支援学校の双方の生徒で SST 後のスキルの生起率が上昇したが、特別支援学校の 3 名の生徒はスキルが維持されなかったことも報告しており、特別支援学校では、スキルの維持効果やスキルに対する自己理解を深めることに課題があると指摘している。しかし、坂内・熊谷 (2017) は、高等学校や特別支援学校において SST を取り入れた進路学習を実施する必要性も指摘している。

まとめ 以上より、2011 年から 2021 年の間に学会誌に掲載され、高校生を対象とした研究件数は 15 件と、小学生や中学生と比較すると多い。それらの研究内容として、まず、親、友人、教員の進路に関するサポート (成田・森田, 2015 ; 大谷他, 2013b, 2015) やメンターからの支援 (橋本, 2016) といった外部のサポートの特徴や進路選択に対する働きに着目した研究が挙げられる。また、進路成熟に対する運動部活動経験の影響 (上野, 2014) や、キャリア意識と学校適応感 (南他, 2013) や学力 (知念・中尾, 2018) との関連など、キャリア発達変数と学校生活上の変数との関連について検討した研究も複数見受けられる。さらに、理系希望者の高校 1 年生の女子に特化して理想のキャリア・パターン別のキャリア自己効力感の特徴について専門職の種類を踏まえて検討した研究 (児玉・唐本, 2017) や卒業後に就職を希望する高校 3 年生に特化して進路探索行動やその関連要因について検討した研究 (大谷他, 2013a, 2013b, 2015), 日本国外の高校 1 年生も対象として国際的な観点から職業観形成の要因に着目した研究 (寺田他, 2012) など、学年以外の観点からも対象者を選定して行われた研究もある。その他、進路形成過程における「悩み」(三関, 2018) や「夢追い型職業」(田中, 2012) に着目した研究、アイデンティティホライズンという比較的新しい構成概念に着目した研究 (溝上, 2020) もある。加えて、キャリアデザイン形成を促す回想展望法の妥当性を確認する研究 (白井, 2015), 特別支援学校の生徒を対処とした事例 (佐々木他, 2020) や SST (坂内・熊谷, 2017) を用いた研究もある。これらのように、2011 年～2021 年のキャリア発達研究の内容は多様な観点を取り上げられているといえる。そして、研究方法として、1 時点の質問紙調査法 (成田・森田, 2015 など), 縦断的な質問紙調査法 (南他, 2013 ; 田中, 2012), 面接法 (三関, 2018 ; 田中, 2012), 実践研究 (坂内・熊谷, 2017 ; 佐々木他, 2020 ; 白井, 2015) と、質問紙調査法が多い傾向にあるものの、実践研究も 3 件行われている。中でも、藤岡 (2015) による 2006 年から 2013 年の研究論文のレビューでは特別支援学校の生徒を対象とした研究は見られなかったものの、その後、特別支援学校の生徒を対象とした実践研究が行われている点は、注目すべきであろう。総じて、小学生や中学生と比較して、高校生を対象としたキャリア発達研究の件数は多く、その内容や方法、対象者が多様性に富んでいるといえる。

#### 複数の学校段階を対象としたキャリア発達研究

中学生、高校生、大学生を対象とした調査研究 山田 (2011b, 2013) は、それぞれ社会人に対するイメージと未来イメージに着目し、中学生、高校生、大学生を対象とした研究を行っている。山田 (2011b) は、描画法を用いた社会人に対するイメージと進路成熟との関連について検討している。その結果、まず、社会人に対するイメージのタイプとして、ポジティブなイメージ、不明瞭なイメージ、能動的にネガティブなイメージ、受動的にネガティブなイメージが抽出されている。その上で、学校段階が高いほど、社会人に対するポジティブなイメージの出現数が少なく、不明瞭なイメージの出現数が多く、進路成熟も高いことを明らかにしている。また、職業進路成熟が社会人に対するポジティブなイメージ、不明瞭なイメージ、受動的にネガティブなイメージに正の影響を示すことを明らかにしている。

次に、山田 (2013) は、中学生、高校生、大学生による未来イメージの相違について検討している。その結果、まず、未来イメージのタイプとして、ポジティブなイメージ、ネガティブなイメージ、ニュートラルなイメージ、認識不能の 4 つのイメージが抽出されている。その上で、就業年齢段階の未来イメージについては、学校段階が高くなるにつれ、ポジティブなイメージが減少し、認識不能が増加傾向にあること、リタイア後の年齢段階の未来イメージについては、学校段階が高くなるにつれ、認識不能が増加傾向にあることを明らかにしている。

進路に関する親のサポートについて、成田 (2014) は、中学生、高校生、大学生における、進路に関する親の実行されたサポートの比較検討をしている。その結果、中学生や高校生は大学生よりも、進路に関して親からポジティブな感情を喚起するようなかかわりや励まし、理解といった情緒的サポートや、親から聞いた職業に関する話といったサポートを多く得ていることを明らかにしている。

**実践研究** 小学生や中学生の時に経験した教育実践やプログラムが、その後のキャリア発達に及ぼす影響について検討した研究も見られる。笠井・荒木 (2016) は、小学校でのライフサイクル思考を取り入れた環境教育の実践の有効性を、中学生になった後の批判的思考力と進路決定スキルの観点から検証している。その結果、小学生の時にライフサイクル思考を取り入れた環境教育を受けた中学2年生は、そのような環境教育を受けなかった中学2年生よりも批判的思考力や進路決定スキルが高いことが明らかにしている。

魚住 (2016) は、地域と連携して実施されている小・中学生を対象としたロボット製作合宿が、参加者の進路選択とキャリア形成に及ぼす影響について検討している。その結果、ロボット製作合宿の参加者の約4割が工業・工学系の進路を選択し、約6割の参加者がその後の進路選択に役に立ったと回答しており、ロボット製作合宿が参加者の進路選択に効果があったと報告している。また、ロボット製作合宿が、キャリア形成に関わる能力である、自己理解能力、コミュニケーション能力、役割把握・認識能力、選択能力、課題解決能力を育成するのに効果があることを見出している。

**まとめ** 以上のように、1度に複数の学校段階を対象とした研究や卒業後の追跡調査を実施している研究が5件行われている。それらの研究内容として、発達段階による社会人や未来イメージの違い (山田, 2011b, 2013)、進路に関する親のサポートの違い (成田, 2014)、環境教育やロボット製作合宿のキャリア発達能力やスキルに対する継時的効果 (笠井・荒木, 2016; 魚住, 2016) が検討されている。また、研究方法として、横断的な質問紙調査法 (成田, 2014)、描画法 (山田, 2011b, 2013)、実践研究 (笠井・荒木, 2016; 魚住, 2016) が採用されている。総じて、複数の学校段階を対象としたキャリア発達研究の件数は多くはないものの、教育実践の継時的効果に着目した研究が見受けられることは、特に注目すべき点であるといえる。

## まとめと今後の課題

本論文では、2011年から2021年までに複数の専門家による審査を経て学会誌に掲載され、小学生、中学生、高校生を対象としたキャリア発達に関する研究論文についてレビューした。その結果、藤岡 (2015) の指摘と同じく、小学生を対象とした研究が少なく、高校生を対象とした研究が多く見られた。しかし、藤岡 (2015) のレビューでは見受けられなかった特別支援学校を対象とした研究 (坂内・熊谷, 2017; 佐々木他, 2020) も2件行われた。また、複数の学校段階の子どもを対象とした研究 (成田, 2014; 山田, 2011b, 2013) や、縦断的研究 (南他, 2013; 三関, 2018; 田中, 2012; 山田, 2011a, 2014) も見受けられ、キャリア発達の動的な側面を捉えようとしている研究がいくつか見られた。また、従来の質問紙調査や面接調査による研究だけでなく、教育実践を通じたキャリア指標の変化を捉える研究 (荒木他, 2020; 笠井・荒木, 2020; 大前他, 2020; 白井, 2015; 魚住, 2016) も実施されていた。さらに、藤岡 (2015) の指摘と同様に、研究内容も多岐にわたっているが、職業観や勤労観、進路選択に関する自己効力感といった、従来の多くのキャリア研究で取り上げられてきた指標だけでなく、社会的自立を目的としたキャリア教育が担うべき重要な役割 (児美川, 2014) である、スキルや能力の形成に着目した研究 (笠井・荒木, 2016; 溝上, 2020; 魚住, 2016) も見られた。以上のように、日本の小学生、中学生、高校生を対象としたキャリア発達研究は、従来よりも多様な方法で多様な内容が取り上げられており、日本社会のキャリア教育に対する高い期待が影響していると考えられる。

今後、小学生を対象としたキャリア発達に関する研究を充実させる必要があるといえる。また、日本の学校教育におけるキャリア教育を充実させるために、小学生、中学生、高校生を対象としたキャリア発達に関する定量的、定性的研究を行うとともに、縦断的研究や教育実践を通じたキャリア発達指標の変化を捉える研究を蓄積し、より効果的なキャリア教育の実践につなげるための基礎資料を学校教育に提示することも課題の1つとして位置づけられる。

## 引用文献

- 安達 知郎・佐藤 修哉・赤木 麻衣 (2014). 中学生のコミュニケーション体験に関する研究——親、友達とのコミュニケーションを中心に—— 家族心理学研究, 28, 38-52.
- 荒木 淳子・高橋 薫・柏原 拓史・佐藤 朝美 (2020). 地域の大人との対話が中学生のキャリア意識に与える影響の分析——ライフキャリア・レジリエンスと自尊感情に着目して—— 日本教育工学会論文誌, 44, 169-172. doi:10.15077/jjet.S44101
- 知念 秀明・中尾 達馬 (2018). 沖縄県 A 高等学校 3 年生におけるキャリア意識、学力、卒業後の進路の関連性 キャリア教育研究, 37, 11-16. doi:10.20757/jssce.37.1\_11
- 中央教育審議会 (2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申). [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm) (2021 年 11 月 27 日閲覧)
- 藤岡 秀樹 (2015). 日本におけるキャリア教育の研究動向と課題 京都教育大学教育実践研究紀要, 15, 249-258.
- 橋本 孝志 (2016). 高校生のメンターからの支援内容についてのコース間の差異に関する研究——専門科・普通科高校生に対するアンケート調査結果の分析から—— キャリア教育研究, 35, 11-19. doi:10.20757/jssce.35.1\_11
- 笠井 利浩・荒木 史代 (2016). 小学校におけるライフサイクル思考に基づく環境教育プログラムの実践と評価——中学生対象の批判的思考・進路決定スキルに関するフォローアップ調査の結果から—— 日本 LCA 学会誌, 12, 273-284. doi:10.3370/lca.12.273
- 児玉 真樹子・唐本 ふみ (2017). 理想のキャリア・パターン別にみた女子高校生のキャリア自己効力と専門職に対する興味との関連——理系希望者の多い進学校を対象に—— キャリア教育研究, 36, 1-11. doi:10.20757/jssce.36.1\_1
- 児美川 孝一郎 (2014). 〈移行〉支援としてのキャリア教育 溝上 慎一・松下 佳代 (編) 高校・大学から仕事へのトランジション——変容する能力・アイデンティティと教育—— (pp.119-137) ナカニシヤ出版
- 三村 隆男 (2020). キャリア教育の理念と性格 日本キャリア教育学会 (編) 新版キャリア教育概説 (pp.7-33) 東洋館出版社
- 南 雅則・浅川 潔司・新見 直子・古川 雅文・三木 麻里子 (2013). 高校生活に対する予期不安と高校生の学校適応感・キャリア意識に関する研究——高校入学初期段階に焦点をあてて—— キャリア教育研究, 32, 1-13. doi:10.20757/jssce.32.1\_1
- 三関 直樹 (2018). 中堅受験校の高校生の進路形成過程における「悩み」の実証的研究 日本高校教育学会年報, 25, 62-71.
- 三輪 聡子 (2012). 道徳授業における児童の勤労観形成にアナロジー推論が与える影響 教育心理学研究, 60, 310-323. doi:10.5926/jjep.60.310
- 宮田 延実 (2012). 小学生の希望職業からみた職業的発達の検討 キャリア教育研究, 30, 53-60. doi:10.20757/jssce.30.2\_53
- 溝上 慎一 (2020). 地方在住の高校生のアイデンティティホライズン——心理社会的影響を考慮したアイデンティティ研究—— 青年心理学研究, 32, 1-15. doi:10.20688/jsyap.32.1\_1
- 文部科学省 (2017a). 小学校学習指導要領 [https://www.mext.go.jp/content/1413522\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf) (2021 年 11 月 27 日閲覧)
- 文部科学省 (2017b). 中学校学習指導要領 [https://www.mext.go.jp/content/1413522\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf) (2021 年 11 月 27 日閲覧)
- 文部科学省 (2018). 高等学校学習指導要領 [https://www.mext.go.jp/content/1384661\\_6\\_1\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf) (2021 年 11 月 27 日閲覧)
- 永作 稔・新井 邦二郎 (2005). 自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討 教育心理学研究, 53, 516-528. doi:10.5926/jjep1953.53.4\_516
- 成田 絵史 (2014). 進路に関する親のサポートの横断的研究——中学生、高校生、大学生を対象として—— 学校心理学研究, 14, 21-31.

- 成田 絵史・森田 美弥子 (2015). 高校生の進路選択における親のサポートについて——進路選択に関する自己効力と行動との関連から—— キャリア教育研究, 33, 47-54. doi:10.20757/jssce.33.2\_47
- 大前 佑斗・古屋 達朗・松下 将也・水越 一貴・八代 一浩・高橋 弘毅 (2020). 初等教育機関における人工知能の教育実践とキャリア形成・動機付け・ルーブリックの関連分析 日本教育工学会論文誌, 44, 213-223. doi:10.15077/jjet.44046
- 大谷 哲弘・木村 諭史・藤生 英行 (2013a). 就職を希望する高校生における進路探索行動と進路意思決定との関係 学校心理学研究, 13, 29-39.
- 大谷 哲弘・木村 諭史・藤生 英行 (2013b). 就職を希望する高校生の進路選択におけるサポート知覚と進路意思決定との関係 カウンセリング研究, 46, 127-137. doi:10.11544/cou.46.3\_127
- 大谷 哲弘・山本 奨・藤生 英行 (2015). 就職を希望する高校生の進路意思決定に影響を及ぼす要因に関する短期縦断的検討 カウンセリング研究, 48, 207-217. doi:10.11544/cou.48.4\_207
- 坂内 仁・熊谷 恵子 (2017). 高校生の就労に関わるソーシャルスキルの指導——高等学校と特別支援学校における短期指導の事例の比較検討—— LD 研究, 26, 240-252. doi:10.32198/jald.26.2\_240
- 佐々木 敏幸・小野島 昂洋・縄岡 好晴 (2020). 知的障害を伴う自閉スペクトラム症の高等部生徒における職業行動の向上——TTAP アセスメントに基づいた作業学習における構造化の指導—— 自閉症スペクトラム研究, 18, 61-65. doi:10.32220/japanacademyofas.18.1\_61
- 白井 利明 (2015). 高校生のキャリア・デザイン形成における回想展望法の効果 キャリア教育研究, 34, 11-16. doi:10.20757/jssce.34.1\_11
- 田中 秀幸 (2012). 進路多様校における進路選択の変容——高等学校3年間における成績・希望進路の継続調査—— キャリアデザイン研究, 8, 35-49.
- 寺田 盛紀・紺田 広明・清水 和秋 (2012). 高校生の職業観形成とその要因に関する比較教育文化的研究——6か国における第10年次生に対するアンケート調査結果の分析から—— キャリア教育研究, 31, 1-13. doi:10.20757/jssce.31.1\_1
- 上野 耕平 (2014). ライフスキルの獲得を導く運動部活動経験が高校生の進路成熟に及ぼす影響 スポーツ教育学研究, 34, 13-22. doi:10.7219/jsses.34.1\_13
- 魚住 明生 (2016). 小・中学生対象のロボット製作合宿が参加者の進路選択とキャリア形成に及ぼす影響 科学教育研究, 40, 374-382. doi:10.14935/jssej.40.374
- 山田 智之 (2011a). 職場体験による中学生の進路成熟及び自律的高校進学動機の変容と影響要因 キャリア教育研究, 30, 1-14. doi:10.20757/jssce.30.1\_1
- 山田 智之 (2011b). 学生(中・高・大学生)の社会人に対するイメージと進路成熟との関連性に関する研究 キャリアデザイン研究, 7, 119-135.
- 山田 智之 (2013). 中・高・大学生における未来イメージの相違 キャリアデザイン研究, 9, 79-91.
- 山田 智之 (2014). 中学校3年生の自律的高校進学動機の変容 キャリア教育研究, 33, 1-10. doi:10.20757/jssce.33.1\_1
- 山田 智之 (2016). レジリエンスが中学生のキャリアイメージに及ぼす影響 キャリアデザイン研究, 12, 135-143.